

アメリカ大陸横断皆既日食観察探検隊報告 Vol. 2

「いよいよだ、くるぞ、くるぞ」隣の競技場からは唸り声が聞こえてくる。空を見上げると西の方から暗い影が急速に頭上の空を覆ってきた。「空が暗い、本影垂きた～」



撮影者 M.AKAMATSU

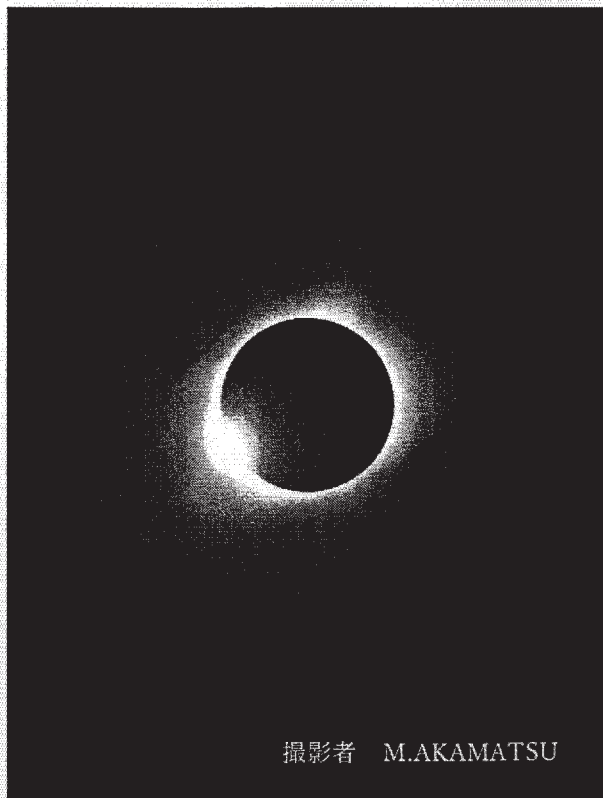
月の影に観測地点が入ったのだ。その直後、太陽の眩しい輝きが小さくなり、ついにダイヤモンドリングが現れた。あたり中が悲鳴に包まれる。ここからは肉眼での観察が可能だ。カメラのフィルターを外す。やがて輝くダイヤモンドの光はスイッチを切るように急に消え、空は闇になった。同時に黒い太陽を取り巻く真珠色のコロナが現れ、空には星が輝いている。「きた～～、すげえ～、皆既い～、」「ブラボー」「わははははっ」「ワ

オ～ン」周囲から歓声が上がる、メイン競技場の方からはもっとすごい雄叫びや吠え声が聞こえる。「コロナ見たあ～きれい～」「紅炎が見える！」「あの真っ黒の丸は月か

あ」午前10時21分50秒、太陽の右上から再び太陽が輝き始めた。第3接触だ。見事なダイヤモンドリングが現れた。「うわわわ、すごいすごい、終わるう～」やがてダイヤモンドの輝きが黒い食の部分を侵食していき、もはや眩しくて肉眼では観測できなくなった。周囲は一気に元の夏の陽射しに包まれてしまった。陽射しの温かさを感じる。

「あああ、終わったあ、皆既日食完全観測！やったぞ～！」グランドのあちこちから拍手が聞こえてくる。私もこの偉大な天体活劇に拍手を送った。

「このためだけに来たんやなあ」部分食がすべて終わるまで撮影を続けている息子2号が呟く。朝露の乾いた芝生に仰向けに倒れ、しばし私は感慨にふけた。「…………晴れて良かった」もし今回も雨や曇りで見られなければ、もはや優しい気持ちで人生を送ることは



撮影者 M.AKAMATSU



コロナと共に燃え尽きた

難しくなってしまっただろう。午前11時41分17秒、第4接触つまり月と太陽が完全に離れて日食は終了した。今体験したばかりなのに、なんだか記憶があいまいである。「空の色はどうだったっけ？コロナはどんなに広がっていたっけ？第2接触の時のダイヤモンドリングはどうだったっけ？」

昨夜ホテルで行われた、観察事前研修での和歌山大学の尾久土教授の言葉が思い出された。「皆既日食は世界のどこかで18年間に10

回程度生じます。つまりほぼ2年に1回であり、まれな現象ではありません。しかし、地球は広いので皆既が自分住む地域で起こるのは340年に1回です」

皆既日食とはこちらから観察に赴かねばならないものなのだ。待っていては一生涯見ることはできない人がほとんどだ。東京では2035年9月2日に皆既日食が見られる。後18年後である。それを待つのもよいが、その時、台風が来たり、秋雨が降ったり……必ず観測できる保証はないのである。

さて部分食の終了までを撮影し、昼食を摂ることになった。近くのチャイナレストランが一杯なので、料理を向かいの教会の礼拝堂にケータリングして、ビュッフェスタイルで食べた。「アルコールは出せません」というのは教会だからだろうか？

帰路についたが、予想通りシアトルのホテルまでの670kmの道は、日食観察を終えて帰る人の車、キャンピングカーで大渋滞しており、バスは13時間かけて深夜午前2時半にホテルに着いた。かなり高級なホテルだったが、3時間半しか滞在できずに早朝シアトル空港に向かった。しかし、私たちの心は十分に満たされていた。

バンクーバー経由で日本に帰った翌日、宵の西の空には細い三日月が見られた。太陽を覆った新月は、何事もなかったかのように、また満ち始めているのだった。

皆既日食は、地球から太陽までの距離が、地球から月までの距離の400倍で、なおかつ太陽の直径が月の400倍であるという偶然によってもたらされる奇蹟である。しかしこの奇蹟も永遠ではない。月は少しずつ地球から遠ざかっており、今後は月が少し小さく見えるため、皆既の際には金環食になってしまうようだ（まだ当分は大丈夫だろうが）。2027年8月2日にはアフリカ北部モロッコで皆既日食がある。これは皆既の時間が6分22秒もあり、気候的にも乾燥地帯なので相当に有望である。現在第3次観測探検隊を編成中である。（10年先かあ……）



コロナを観察中の我々探検隊 (イメージ)